



1



2



3

1_ホップ農家の方ともビアツーリズムの話や醸造に関する話など、随時打ち合わせをしている 2_5月にオープンした「遠野醸造TAPROOM」。遠野産ホップを使ったクラフトビールなどを楽しむことができる醸造所&パブとなっている 3_現在、8月25・26日に行われるホップ収穫祭に向けて実行委員メンバーが準備を進めている。当日の会場は蔵の道ひろば。遠野醸造のビールも販売される予定

「遠野ホップ収穫祭」の実行委員長も担当。今年初めてチャレンジする企画も考えていて、パワーアップしたイベントにするべく、実行委員のメンバー全員で準備しています。みなさんも、ぜひ足を運んでください。

イベント 8月に企画しているイベントです
お気軽にお問い合わせください

第10回おもしろTONO学
『遠野物語 序文の世界』

- 日時：8月25日(土)9時～15時半
※開催日は26日から変更になりました
- 集合：旧三田屋呉服店(一市通り)
- 内容：柳田國男が100年前に歩き、遠野物語の冒頭に生き生きと記した遠野の道を追体験する試みです。
- 参加費：2,500円(市内在住の方：1,500円)
- 定員：20人
- 問い合わせ
to knowプロジェクト富川岳
電話：080-5451-0290
メール：gaku@tomikawaya.com



「ビールの里実現へ」
ビールプロジェクト 田村淳一さん

遠野に移住し起業を目指す皆さんを紹介
遠野で起業に挑戦中！
Vol.5

遠野に来る前はどんなことをしていましたか？

新卒で入社した会社で、主に住宅分野の新規事業立ち上げや法人向けコンサルティングを7年間担当。貴重な経験をさせてもらったサラリーマン時代でした。一方で、いつかは都市部ではなく地方で活動したいという想いがあり、会社を辞めて遠野に拠点を移し

ました。
遠野に来てからどんな活動を
してきましたか？



「ビールの里実現へ」
ビールプロジェクト 田村淳一さん

平成28年から市と(株)ネクスト commons が手がける「ローカルベンチャー事業」。遠野に移り住んだ10数人の地域資源を生かした起業・事業化や自立に向けた活動の様子、イベント情報などをお伝えします。

遠野に移住し、当初はローカルベンチャー事業で移住してきたメンバーのプロジェクトや事業の立ち上げ支援を担当していました。昨年、株式会社遠野醸造を立ち上げるタイミングで、ビールプロジェクトの活動に関わることを決

めました。遠野醸造では、経営戦略のアドバイザーや外部との渉外などを担当しています。また、遠野市の「ビールの里」構想を実現するための活動をメインに行っています。組織体制を整備し、中長期的な計画を考え、未来に繋がるプロジェクトを企画・実行していきます。

今後の目標や取り組みたいことを教えてください。

遠野が「ビールの里」になっていくには何が必要なのかを考え、それらを少しずつ形にしていきたいです。将来的に醸造所も、もう一つ作りたいと考えていますし、ホップやビールにまつわる商品開発にも取り組みたいです。今年「遠野ホップ収穫祭」の実行委員長も担当。今年初めてチャレンジする企画も考えていて、パワーアップしたイベントにするべく、実行委員のメンバー全員で準備しています。みなさんも、ぜひ足を運んでください。

レポート 6月の活動のトピックをお伝えします

▼一日市通りに新拠点「小上がり」と裏庭と道具「U」がオープン！

一日市通りにある「commons・スペース」の隣に、どなたにでも自由にご利用いただける拠点ができました。名前のおり、小上がりや裏庭の他、工具や3Dプリンター、パソコン、本、裁縫道具など、置いてあるものを使って自由にお過ごしいただけます。



▼ビールプロジェクトに新メンバー！

ビールプロジェクトに、新しく3人のメンバーが加わりました。ホップ生産、ビアツーリズムなどの活動を行います。

- 左から
- 美浦純子さん、横浜市からビールツーリズム担当
 - 里見一彦さん、さいたま市からホップ農家
 - 中村友隆さん、名古屋市からホップ農家



遠野文化研究センターだより とおのじん -其の3-

遠野人

遠野文化研究センターの活動に興味を持っていただけるような情報を、6月号からお届けしています。
今月も、あの「カップ」です。

★筆者 **木瀬 公二**

遠野文化研究センター研究員、朝日新聞・社友記者。1948年東京生まれ。73年朝日新聞入社。元盛岡総局長。08年に遠野部に移住。著書に遠野物語関連の『119のはなし』など。



7月号に続いてカップの話です。いま、博物館で「遠野物語と河童」展が開かれているからです。話は、10年前の市長室から始まります。移住してきた私が、遠野市を担当する新聞記者としてあいさつに伺った時のことです。

応接セットの脇テーブルにあったチラシのような物が目に入った。「カップ村広報」という題字が読めた。首都圏を中心にしたカップ愛好家を作る団体で、年明けに新年会をすると書かれていた。その会場が、私が学生時代によく通った新宿の飲み屋だった。懐かしさも手伝い早速、新年会の参加を申し込んだ。



カップ調査用のやぐら

久しぶりの飲み屋は、マスターは昔のまま。ピアノがありドラムがありギターやカスタネットなどを自由に使い歌い、踊るそのスタイルも同じだった。そのうさい中で、カップ村の大野芳村長に話を聞いた。1975年に会を結成し、その年にカップ探しのために遠野に来たと言った。猿ヶ石川の河原にテントを張って5日間、捜した。

目撃者も訪ね歩いたという。

新年会場には、カップの番組を作った元NHKディレクターもいた。その番組「河童は生きている」のビデオを貸してもらった。全国のカップ目撃談を集めた中に、「カップの皿を持っている」という沿岸部の人も登場した。ディレクターはそれを借り、東京国立博物館で鑑定してもらったところ「ウニ科の動物の化石」と鑑定されたが、それは放映されていなかった。

カップ村は3年前、開村40年記念で再び遠野を訪れた。地元の文化にも触れようと遠野郷八幡宮の流鏝馬も見学した。最前列のその席で見ていると、先頭を歩く馬のシラユキが落ち着かない。いつもおとなしいの

にどうしたのだろう、と周りの人もいぶかしがった。カップ村の収入役はピンときた。馬の天敵はカップ。収入役は全員の胸についた「カップ村民」の名札を回収して両手で封印し「カップの気配を消すように」と伝言。それから間もなくシラユキは落ち着いた。

そんな交流を、カップ村と遠野市は深め、昨年11月には、大阪府在住の会員の收藏品1576点を寄贈いただいた。文化研究センターの長谷川浩学芸員らがそれを受けてきた。そのお披露目をしようとい



河童展を解説する長谷川学芸員

うのが、今回の展覧会の目的の一つだ。寄贈品の中から、目で見て楽しめる全国のカップ民芸品を中心に約100点を展示した。

ほかにも、長谷川学芸員らが各地を回って借りてきた、江戸時代の河童研究書「水虎考略」(国立公文書館収蔵)や、盛岡南部家が所蔵していた、全国で見つかったカップの姿を集めた「水虎之図」、カップのミイラ、カップの詫び状など約200点が展示されている。ついでに記すと、前号で触れた、私がおもらったカップから教えられて作った薬も並んでいる。

カップとは何か。その正体を考えるということは、私たち人間がどう生き、どう暮らしてきたかを考えることと同じことだと思います。ぜひお出かけください。

★今月のプレゼント

このコーナーについてご意見・ご感想をお寄せいただいた方3名様へ、抽選で上記博物館特別展図録『遠野物語と河童』をプレゼントします。①お名前②ご住所③電話番号④感想一を添え郵送、ファクス、メールのいずれかで下記まで送付ください。多数の応募をお待ちしております。※締切8月31日(金)



★問い合わせ：遠野市東館町3-9(遠野市立博物館内)/TEL:60-2800/FAX:62-5758/MAIL:tono100@city.tono.iwate.jp